ースタッフ紹介ー

役　職	スタッフ名
主任部長	大西　亨
部長兼内視鏡センター長	髙谷　宏樹
医　長	山原　邦浩
医　長	中野　智景

＜肝臓内分泌分野＞

ー概要ー

当院は日本消化器病学会認定施設であり、大阪府における肝炎専門医療機関である。

当科は常勤医4名であるが、日本消化器病指導医2名、日本消化器病専門医2名、日本消化器内視鏡学会指導医2名、日本肝臓学会専門医2名を含む。

非常勤医は1名のみで週一日外来を担当してもらっている。

また大阪府肝炎医療コーディネーターを1名設置し、肝炎治療に対応している。

当科の対象疾患としては急性・慢性肝炎、肝硬変、肝がん、胆膵部門としては膵がん、膵のう胞性疾患、急性・慢性膵炎、総胆管結石、胆のう炎、胆管結石である。

人事面の変更はない。

ー実績ー

内視鏡件数等詳細は内視鏡センターでの記述に譲る。

肝疾患内訳に関しては

B型肝炎　113名

C型肝炎　55名

原発性胆汁性胆管炎　　22名

自己免疫性肝炎　15名

Overlap syndrome　6名

となっており、患者数が増加している。

ちなみに2022年のC型肝炎に対する直接作用型抗ウィルス剤の導入は8件であった。

それ以外に新規肝障害紹介患者の精査、アルコール性肝疾患、各種肝硬変患者などのマネージメントを行っている。

2022年はコロナウイルスによる生活様式変化の影響もあったのかアルコールによる重度の肝不全患者が多かった印象であった。

院内で測定した肝炎ウィルス陽性患者の全数把握は継続しており、全ての患者がもれなく精査、治療の機会を得られるよう鋭意努力している。

肝がん患者に対しては当院外科での手術や、放射線科の協力を仰いでの肝動脈塞栓術、免疫チェックポイント製剤による加療等で対応している。

ー今年度の成果と反省点ー

地域中核病院として新規肝障害患者の受け入れも積極的に行い、薬剤性肝障害、自己免疫疾患による肝障害や原因不明の肝障害患者の精査、加療などを行った。また他科からの肝腫瘍破裂後患者の治療やEICU管理重症肝不全患者の診療補助を行った。

ー来年度への抱負ー

肝障害に対する精査依頼、相談が増加傾向にあり、今後とも他科や地域との連携をとって診療を進めていきたい。

＜消化管・胆膵分野＞

―概要―

消化器内科（消化管・胆膵グループ）では内視鏡を用いた検査、治療と消化器良性疾患、炎症性腸疾患、胆膵悪性疾患のがん化学療法を含めた治療を行っている。当科は日本消化器病学会、日本消化器内視鏡学会の認定指導施設であり、当院で研鑽を積むことでそれぞれの専門医の取得が可能である。2021年度に消化器病専門医、消化器内視鏡学会専門医の山原医師が入職し、より幅広くたくさんの外来患者、入院患者の診療が行えた。さらに夜間、休日の緊急処置も多く行えるようになった。

また、2021年度から新消化器内視鏡センターがオープンして、機器、ファイリングシステム、洗浄装置も更新され検査の質、量ともに向上した。

新型コロナウイルス感染症が猛威を振るう中、医師、看護師には検査中はfull　PPE、N95マスクの装着を徹底し、内視鏡検査でのウイルス感染症の予防を徹底した。

また、救急かつ重症の消化器患者の診療に関しては救命診療科と密に連携して救命率の向上が行えている。

―実績―

消化器内視鏡センターの業績は内視鏡センターのページを参照していただきたい。

内視鏡治療以外の入院は急性胃腸炎、イレウス、大腸憩室炎、潰瘍性大腸炎やクローン病、胆膵の進行がんに対する抗がん剤投与などの疾患であるがそのうちの半数以上は緊急入院患者であった。

外来診療においても紹介患者数も順調に増加している。

―今年度の成果と反省点―

新型コロナ感染症が蔓延している中でも内視鏡検査業務、患者の診療業務で感染するスタッフはいなかった。入院患者総数は減少したが大腸ポリープ切除を外来で行うことが多くなったのも関係すると思われる。内視鏡検査数、消化器内科入院患者数も大きく減少することもなく運営が行えている。反省点としては1名後期研修医が研修プログラムで他院に出向したが、都合で当院を退職してしまったことがあげられる。後期研修医の地域プログラムが災いしたと考えられ、改善が望まれる。

―来年度への抱負―

やはり、患者数に対して医師の数が圧倒的に少ない現状が続いている。今後の継続した消化器内科診療のためには若手の採用が望まれる。

今後はスッタフ各々が研鑽に努め地域の消化器疾患を持つ患者に継続的に安心して医療を提供できるようにしていきたい。

検査室

リカバリー室